



背景

昭和62年（1987）7月、徳島県三好市山城町の国道32号で土石流が発生し、車両4台が被災しました。この災害は、トラック2台が土石流の直撃を受けて吉野川に転落、乗用車1台は路上に埋まり大破し、ライトバン1台は路上を流され川側のガードレールで止まり吉野川への転落は免れるという災害でした。しかし、車両運転者等の適切な避難行動により、奇跡的に人身被害は発生しませんでした。

アクセス

災害現場付近（国道32号の距離標81/8）

- JR大歩危駅より南南東へ直線距離約3km
- 三好市山城町下名
- 緯度経度 北緯33度51分13秒，東経133度47分14秒



昭和六十二年（一九八七）に国道三二号で土石流に遭遇した人の体験談です。
七月一四日午後九時頃、三好市山城町の国道三二号の現場付近一帯は、梅雨前線による集中豪雨のため土砂降りでした。
高知から高松に向かって走行中のライトバンが、豪雨により山側斜面から流出していた土砂にタイヤを取られて脱出できなくなりました。同乗者が車外に出て後続車等に応援を依頼し、これに応じた後続のトラックと対向車線を走行していた乗用車及びトラックが路上に停車し、運転者や同乗者が救出応援に向かい、車両を押しやりました。
その時、乗用車の運転者は、路面を流れていた流水の色が赤く変わり、斜面の上部でバリバリという木々が裂けるような音が聞こえたため、とっさに危険を感じ、全員に池田側に逃げるように指示をしました。すると、その直後に山側からの大量の土石流が上り線側のトラックを直撃し、トラックは吉野川に転落し、ライトバンは運転者が車内に残されたまま土砂流により路面上を滑走し、川側のガードレールで止まり、運転者は脱出しました。
車両四台の搭乗者（計八人）は、車両を現場に残したまま現場を離れ、山城町駐在所に災害発生を通報しました。その後、次の土石流が発生し、下り線に停車していた乗用車とトラックを直撃して、乗用車が埋まり、トラックは吉野川に転落しました。

流水の色の変化と木々が裂けるような音に危険を察知できたことが、車両四台が被災した大災害にもかかわらず人身被害が皆無という奇跡的な結果をもたらしたのです。